大慧宗杲とその弟子たち（八）

――真歇清了との関係をめぐって（承前）――

石井修道

余靖（一〇〇〇―一〇六四）が著した「筠州洞山普利禅院伝法記」（『武溪集』巻九所収）によると、従来全く紹介されなかった洞山の初期の形態を理解することができる。一世良价（八〇七―八六九）・二世道全（八九四年寂）・三世師虔（九〇四年寂）・四世道延（九二二年寂）・五世恵敏（九四八年寂）・六世嗣（九六四年寂）・七世文坦・八世清稟・九世彦聞・十世守詮・十一世暁聡（一〇三〇年寂）・十二世自宝（九七八―一〇五四）・十三世鑒遷の十三世までのうち、八五二年頃に、新豊洞すなわち洞山に入った良价から五世恵敏まで、約百年間にわたって良价の法を嗣いだ人々によって維持発展されたことと、この伝法記が書かれた景祐五年（一〇三八）は十二世自宝が黄檗に移って後、その法嗣鑒遷の住持であるが、十一世の暁聡をはじめ、雲門宗の人々によって維持されていたことである。この景祐五年とは、大陽警玄（九四三―一〇二七）の示寂後十一年であり、また代付を受けた投子義青（一〇三二―一〇八三）がわずか七歳の時であり、一〇七〇年代に洞山に住した真浄克文は、無事禅批判を鋭く行っているのである。(1)

ところでこのように全く勢力を失った曹洞宗を、再び復興するのは、湖北省の大洪山を中心とする芙蓉道楷（一〇四三―一一一八）――丹霞子淳（一〇四六―一一一七）であり、特に子淳の弟子の「三傑」とか「道楷の三賢孫」と呼ばれる慧照慶預（一〇七八―一一四〇）・真歇清了（一〇八八―一一五一）・宏智正覚（一〇九一―一一五七）の三人の出世によって、一大勢力となったのである。(2) このうち真歇清了が、大慧宗杲（一〇八九―一一六三）の黙照批判の対象であり、その時期と場所が、紹興四年（一一三四）より紹興七年（一一三七）までの大慧福建時代で、雪峯住持の真歇およびその後住の慧照と限定され、その後の批判は、この時の内容を、畳み掛けるような連続的くりかえしであることを以前に問題にしたのである。(3) また柳田聖山先生が「無字の周辺」（「禅文化研究所紀要」第七

号）および「看話と黙照」（「花園大学研究紀要」第六号、共に昭和五十年）の論文で、特に朱子を中心にこの問題の詳細な解明をされているのである。ここでさらに問題にしようとするのは、真歇清了に関する大慧批判当時の二三の今まで紹介されなかつた新しい資料で、真歇清了の宗風解明の一助にしたいためである。

まず李綱（一〇八三―一一四〇）の「雪峰真歇了禅師一掌録序」（『梁谿全集』巻一三七所収）をみてみよう。

自達磨流通、正法眼蔵、如一燈分百千燈、以心伝心。雖法無南北、而機有差別、其帰一也。雪峰了禅師、得法于丹霞淳、淳得法于芙蓉楷、伝曹洞宗旨。門風孤峭、壁立千仞、有所施設、皆被上機、非中下根器、所能窺測。了公自号真歇。了昔演法于長蘆、今開席于雪峰。学徒雲集、従之者、常千五百余衆。叢林之盛、所未嘗有。随機提令、応病施方。有作者之鈴鎚、真良医之薬石。一言一句、皆示空劫中眼目、非苟然也。其徒集機縁語句、為一掌録、以初得法由一掌故。録成以示梁谿・病叟。病叟讃歎、為説偈言。其一曰、真歇頽辺遭一掌。大愚肋下築三拳。自従黙契宗風後、顚倒縱横総是禅。其二曰、正令全提上上機。学人到此莫驚疑。直須吼裂野子脳。始是金毛獅子児。説偈畢以其録帰之。因書其語、置篇首云。

紹興四年歳次甲寅二月朔序（一一丁右―一二丁右）

この序文は種々の問題を提供するのである。一般に真歇には『真州長蘆了和尚劫外録』というのが知られているが、『一掌録』については全く知られていなかったのである。宏智正覚の撰する「崇先真歇了禅師塔銘」によると、

語録両集、行於世。（続蔵経巻一二四―三一八a）

とあつて、「両集」あったとし、真歇には『信心銘』の注釈書の『拈古』が存するので、『劫外録』と共に考えられていたが、「塔銘」そのものも、現在は『劫外録』の末尾に付されているが、撰述は『劫外録』とは無関係であり、たまたま編集の時に付されたにすぎない。『一掌録』が存するとすれば、「両集」の内容に最もふさわしいといえよう。『一掌』とは、「初得法」の機縁であり、「塔銘」には、

投鄧之丹霞山淳禅師之席。一日入室。霞問、如何是空劫以前自己。師擬進語。霞与一掌。師豁然開悟。（同書、三一七b）

とあり、『劫外録』の機縁に

師初見丹霞。霞問、作麼生是空劫已前自己。師擬対。霞云、儞鬧、且去。一日登鉢盂峯、豁然契悟。径帰見丹霞、方侍立、霞劈耳便掌云、将謂儞知有。師忻然礼拝。（同書、三一五b）

とあつて、共に「一掌」を伝えている。この『一掌録』は現在全く知られないかというと、恐くは『続開古尊宿語要』巻二所収の「真歇了禅師語」がそれの抜粋に当ると思われる。例えば十七の上堂のうち次の四つの上堂は、自称に「雪峯」という語を使用している。

(イ)撼拄杖云、看看、三千大千世界、一時揺動。雲門大師即得、雪

峯、即不然。卓拄杖云、三千大千世界、向甚麽処去。還会麽。不得重梅雨、秧苗争見青。

(ロ)久默斯要、不務速説。釈迦老子也待要款曲売弄、争奈未出母胎、已被人覷破。且道、覷破箇甚麽。良久云、瞞雪峯不得。

(ハ)松風吟、鵶鵲詠。各自説、各自聴。唱一漚未発宗乗、提千聖不伝正令。如今開口尽無端。爛醉舌頭何日醒。且道、雪峯今日為甚麽也有些毛病。曲為今時一盃。只得大家酩酊。

(ニ)天不言、四時行、地不言、万物生。拄杖子不言、衲僧倒戈卸甲、高竪旌旗、不敢正眼覷著、雪峯擬欲放過、将謂欺善怕悪。遂卓拄杖云、誰奈我何。(続蔵経巻一一八—四五四d—四五五b)

しかも「七仏偈賛」の最後は、

釈迦牟尼仏

目顧四方、天生伎倆。古曲韻高、断絃絶賞。拈頭作尾、起模画様。殃及児孫、白遭一掌。(同書、四五五d)

とあつて、釈尊出世のおかげで「一掌」に出合うことの出来たよろこびを表現していて、真歇自身に、「一掌」に対する自覚が強く働いていることを見い出すことができるのである。真歇の『劫外録』が一度も『続開古尊宿語要』に引用されないのは、例えば古い宋版の存する『宏智録』六巻のうち、『続開古尊宿語要』の「宏智覚和尚語」について見てみると、上堂三十五はすべて天童山時代の巻三であり、巻六の偈賛および巻四の法語からみても、長蘆時代の語が見い出されない理由がわかる。「両集」の語録のうち『続開古尊宿語要』の編者にとつて、真歇の語を代表するのは、晩年の雪峯時代の『一掌録』を意味したと思われる。(4)

序文にあらわれる「紹興四年二月」および「病叟」は、また重要な意味をなすものである。病叟とは劉屏山(一一〇一—一一四七)で、字は彦沖といい、若き日の朱子の師で、兄の劉宝学と共に、大慧が与えた手紙が『大慧書』に存し、黙照批判を最も強く主張する手紙である。紹興四年は大慧の黙照批判の始る年であるが、大慧が雪峯を尋ねるのは、三月であり、二月にすでに『一掌録』の序が撰せられていたことは、注意しなければならない。劉宝学・劉彦沖への手紙は、『大慧年譜』によると、この年より五年後の初住径山の大慧五十一歳の時に与えたものとされ、大慧の最も活躍した時のことである。このように大慧側の資料が多くあつたにもかかわらず、真歇に関する資料が不足していただけに、短文とはいえ大事な資料といえよう。

『一掌録』にみられる真歇の宗風は、「空劫以前の自己」を「語」らんとするに、一掌を与えられて、開悟したとあるところからも理解できるし、病叟の偈の「黙契宗風」であり、それは上上機なる者への「正令全提」として把握してよいであろう。師の丹霞子淳は「自宗」と題して、

空劫自己無依守、仏祖従来難啓口。九年面壁太多端、那堪更強分

妍醜。（『丹霞子淳禅師語録』続蔵経巻一二四―二四六ｂｃ）

と述べているが、仏祖が示して来た空劫の自己は達磨の面壁にあるとするが、この立場を忠実に受けた人こそ真歇といえよう。真歇の長蘆時代の語録が『劫外録』といわれるのも、ここにある。

丹霞―真歇の宗風がこのように理解される時、張守（一〇八四―一一四五）が著した「大陽明安禅師古録序」（『毘陵集』巻十所収）の次の文は興味深いものがある。

夫、功以漸修、道由頓悟。漸修匪易、頓悟匪難。一宿九年、非久非近。憶、昔我世尊、憫仏子等、歴劫漂沈、周迴生死、開大法門。極力拯救、揩磨積習、令不退転。垢尽明現、始見本原、猶在護持。然後純熟、今一世人、無勇猛心、及堅固力、口耳所伝、未証為証、堕落虚空、無棲泊処。又有甚者、習気未除、淫慾貪嗔、自謂無礙。流転苦海、永無出期、由世導師、軽談空寂。遂令末学、迷真逐妄、不亦悲乎。大陽明安延公禅師、洞山玄孫、梁山嫡子。真得仏祖、所付心印、事理兼融、開遮自在、機鋒覿面、坐断乾坤、至其出力、接引後学。惟恐学人、或堕邪見。防閑開譬、具仏慈悲。洞山以来、家風不堕。真歇老人、出示古録。一語一句、具真実法。雖非即此、可以伝授。亦非離此、而能証明。与近世師、繋風捕影、疑語後学者、異日道也。因書扁首、広衍流布。所期学者、勿信口耳。不忽所易、不倦所難、端的不差、証無上道。

紹興癸丑六月朔旦。東山居士序（七丁左―八丁右）

この『大陽明安禅師古録』なる著は全く不明であり、『人天眼目』に『明安別録』の引用があるが、その著との同異も明らかでない。ただこの序による限り、真歇が出示した大陽警玄の古録であり、紹興三年（一一三三）六月の序であるから、これまた真歇の雪峯時代の接化を示すものとみてよいであろう。大陽の語および宗風を考えるに、『丹霞子淳頌古』を参考にするのがよいと思われる。

大陽玄禅師上堂曰、嵯峨万仞、鳥道難通。剣刃軽氷、誰当履践。宗乗妙句、語路難陳。不二法門、浄名杜口。所以達磨西来、九年面壁、始遇知音。大陽今日也太無端。珍重。

不挂唇皮一句奇。少林冷坐最慈悲。須知此道非伝授。立雪神光已強為。（『増輯丹霞淳禅師語録』前掲書、二五六ｂｃ）

この中で、大陽が達磨西来の意図を面壁ととらえ、丹霞がまた少林の冷坐こそ最も慈悲あるものとして評価している点は、曹洞宗の宗風を伝えて興味深いものがある。大陽山もまた湖北省に存するが、湖北省の曹洞宗復興こそ、黙照禅の正統であり、その宗風へかぶれた士大夫への批判が大慧の黙照批判成立の要因といえよう。

この大慧の黙照批判で、雪峯は大きな打撃を受けたのではなく、真歇のあとを継いで住した師兄の慧照は、雪峯でまた大いに活躍している。慧照については『湖北金石志』巻十一の「随州大洪山第六代住持慧照禅師塔銘」に詳しいが、「雪峯慧照禅師語録序」（『毘陵集』巻十所収）が存するので、それ

を見ると、

慧照預禅師、提如来密印、坐大洪山、孤峯頂上、転大法輪。文字性離、言語道断、超仏越祖、心如太虚。至于随縁応機、接引調伏、如太医王、対病与薬、金毛哮吼、百獣皆瘖。建炎以来、襄漢莽為盗区、赤地千里、大洪屹然、其間豺虎、環視垂涎、而不敢犯道俗、依師獲免者、殆数千万人。夫豈偶然也哉。余帥甌閩、始挽師来、乾元継主雪峯、与其弟了、住相後先。宗風大振、道価益高。門人以師前後言句、示余歎曰、昔聞丹霞淳、而不及識、乃識其三子。師蓋嫡嗣也。次即了、住永嘉之竜翔。其季覚、住四明之天童、一家三傑、皆為東南大導師。聞者奔趨、見者厭満。所至坐下、常千余衆。凡経印可、便為叢林、竜象亦盛矣哉。慧炬所燭、昏霾自消。猶且開方便門、以無説説、普度一切。無絃琴上、品就宮商、白玉田中、種成桃李。即見与聞、而自悟入。豈無其人邪。

紹興八年歳在戊午二月晦日序（八丁左―九丁右）

とあつて、大慧が福建を去つた紹興七年（一一三七）の後も、曹洞宗の勢力は、雪峯山において持続されていたことがわかる。『雪峯慧照禅師語録』そのものについては、現存しないので不明である。

以上、大慧批判当時の黙照禅側の資料として、批判の対象者である真歇の語録が『一掌録』として存在したこと、[5]その『一掌録』が『続開古尊宿語要』所収の「真歇了禅師語」に相応すること、大慧が黙照禅にだまされたとする若き日の朱子の師の劉屏山が、真歇と深い関係にあつたこと、さらに真歇の雪峯時代の接化に使用した『大陽明安禅師古録』が存したこと、真歇のあとをついで雪峯に住持した慧照の勢力も決しておとろえていなかつた点などを考察して来たのであるが、真歇の宗風に関してはさらに総合的な判断のもとに解明されなければならないであろう。その解明によつてより一層大慧の黙照批判の目的や内容が具体化されると思われる。

1 『筠州洞山普利禅院伝法記』の新資料による良价伝の補正、たとえば新豊洞と洞山が同じ場所であること。この土地を布施したのは雷衡で、良价の晩年に咸通広福寺の寺額を賜ったこと。従来全く不明であった会昌破仏時代の良价の隠棲地が山西省遼県であることや、二世道全・三世師虔・四世道延・五世恵敏の没年・本貫・俗姓などが確かめられる点については、石井修道「洞山と洞山良价」（『駒沢大学仏教学部論集』第七号　昭和五十一年）を参照されたい。

2 石井修道「『攻媿集』にみられる禅宗史料――投子義青の法系を中心として――」（『東方宗教』第三十九号）。

3 「大慧宗杲とその弟子たち（六）」の外にも、「大慧語録の基礎的研究（下）――大慧伝研究の再検討――」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三十三号）にも詳細に論じた。

4 語録が存したことは、『宏智広録』巻三（大正蔵巻四八―三四c）にもうかがえる。

5 李綱の『梁谿全集』巻一四一には、「雪峰了禅師真賛」および「仏日杲禅師真賛」も存す。